

二 日本列島の旧石器時代

旧石器時代の自然環境

人類は地質年代でいう新生代新第三紀の後半の鮮新世に登場するが、それに続く第四紀更新世は、非常に寒い氷期と現在よりもやや暖かな間氷期とが交互に繰り返された時代で、氷河時代とも呼ばれる。氷期には日本列島のような中緯度地方で気温が約八度、極地では一〇度以上も下がっていたといわれ、海面は一〇〇メートルも低くなっていた。



第1図 更新世末期の日本列島

(町田洋氏原図)

この時期日本列島は大陸と陸続きになっていて、動物や人類が行き来していた(第1図参照)。約三〇万年前の中期更新世には黄海や朝鮮半島方面から朝鮮海峡や対馬海峡の陸橋を渡って、ナウマンゾウやオオツノジカなどが日本列島に渡来した。長野県野尻湖^{のじりこ}・群馬県上黒岩^{かみくろいわ}や瀬戸内海^{のじりこ}の海底からこれらの動物の骨が発見されている。九州でも大分県大野町の代^たの原^{はら}で約三万七〇〇〇年前のナウマンゾウの骨が発掘されている。約一三万年前に始まった最終間氷期が続くとともに朝鮮海峡が

でき上がり、南方からの動物の移動は途絶えた。しかし、北方の宗谷海峡と間宮海峡は、約一万三〇〇〇年前まで陸橋が存在し、マンモスゾウ・ヘラジカ・ヒグマなどの動物が列島に渡ってきた。日本列島が完全に大陸から切り離されたのは約一万年前の縄文時代に入ってからのものである。

また、第四紀更新世後期の日本列島では、古富士・大山・九重・阿蘇などの火山活動が活発であった。そしてこれらの火山から噴出された溶岩や火山灰は各地に降り積もっていった。例えば、約四万五〇〇〇年前に大山から噴出した大山倉吉火山灰は、関東・北陸地方まで広がっている。また、約二万二〇〇〇年前に現在の鹿児島地域から噴出した始良丹沢火山灰は、遠く東北地方から朝鮮半島までの非常に広い範囲に降り注いでいる。

日本の旧石器

現在発見されている日本最古の旧石器時代の遺跡には、宮城県中峯C遺跡・馬場壇A遺跡など原人段階に属するものがある。これらの遺跡から出土した石器群は一五万年から二〇万年前にさかのぼるといわれている。その後、約四万三〇〇〇年から三万三〇〇〇年前には宮城県座散乱木遺跡や群馬県桐原遺跡でスクレイパーと呼ばれる加工用具や槍先につけられた尖頭器などの石器が製作されている。約三万三〇〇〇年前の新人段階になると、石刃技法が出現し、少数ではあるが部分的に磨いた刃を持つ打製石斧もみられる。その後、全国的に広くナイフ形石器が使用されるようになる。ナイフ形石器は約二万年前にはしだいに地域色を強めて、東北地方を中心に東山・杉久保型、関東・中部地方にも茂呂型、瀬戸内海周辺では国府型(第2図参照)などがそれぞれの文化圏を形成するようになる。旧石器時代終末の一四四〇〇〇年から一萬二〇〇〇年前には短期間に、細石刃文化が急速に列島各地に普及する。

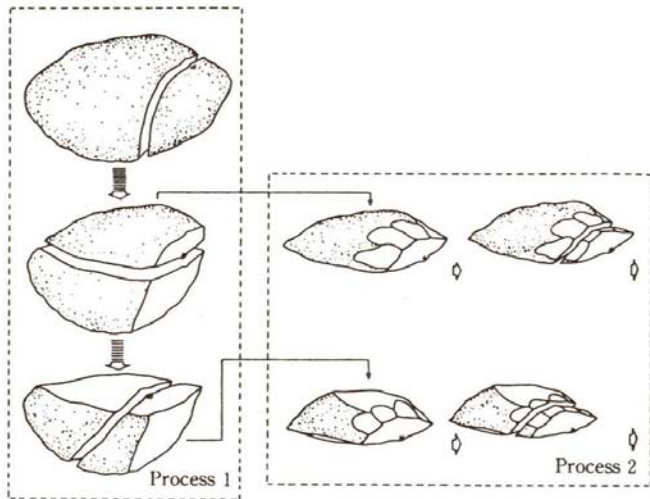
昭和六年（一九三二）に発見され、第二次世界大戦の際に消失した兵庫県明石人は原人の可能性も考えられている。その後発見された人類化石のうち、愛知県牛川人・栃木県葛生人などが旧人に属するといわれている。また静岡県三ヶ日人・浜北人・沖縄県港川人などは新人段階のものである。新人のうち大分県聖岳洞穴では、ナイフ形石器や細石刃とともに頭骨の一部が出土しており、約一万四〇〇〇年前のものとしてされている。

第二節 豊津の旧石器時代の遺跡

豊津町は、南部に複雑に入り組んだ幾つかの小丘陵が延びることから、旧石器時代には動物を狩猟したり、堅

果・果実・根菜類などの植物性食物を採集したりするには適した地理的環境にあったと想像される。

現在確認されている豊津町内の旧石器時代の遺跡には、徳永川ノ上遺跡・鋤先遺跡と長養池遺跡とがあるが、数点の石器が出土しているのみで、具体的な遺構は検出されていない。



第2図 瀬戸内技法と翼状剥片・国府型ナイフ

(松藤和人氏原図)